

<被表彰者の功績概要>

(1) 教職員

① 大橋 雅司（四日市市立南中学校 教諭）

本県中学校教諭として着任以来、自身の教科の専門性を高める研鑽を重ね、それぞれの赴任校の生徒の実情及び時代に応じた授業実践を行っている。また、その成果を広く発信し、本県の理科教育の推進に大きく寄与している。

平成22年度、四日市市教育委員会主催のICTを活用した授業づくりに係る夏季研修会において、理科の授業におけるICT活用事例を発表し、市内小中学校に先進事例を発信した。

平成24年度、全国中学校理科教育研究会佐賀大会において、四日市市立笹川中学校で実践した「粒子概念における指導法の工夫」について発表。科学的思考を高めるためのICT活用を先進的に進めており、好事例を全国に発信した。

平成26年度、三重CST（コア・サイエンス・ティーチャー）の認定を受け、研修会講師、企業と連携した理科教育等を担い、三重県の理科教育の充実、発展に寄与している。

平成27年度、四日市市教育委員会教育支援課課題研究「中学校理科の学習におけるタブレットPCの活用に関する研究—思考・表現することが苦手な生徒に焦点をあてて—」の研究協力員として、四日市市教育委員会と研究を行い、その成果が市内教職員に還元された。

令和元年度、全国中学校理科教育研究会秋田大会において、四日市市立常磐中学校で実践した「理科の見方・考え方を養う学習指導の工夫」について発表。新学習指導要領を見据えた理科の授業の具体的事例を全国に発信した。

令和5年度、三重郡と四日市市の教職員で構成する三泗教育中学校理科研究協議会の会長を務め、理科教育の指導的立場として活躍している。

② 中 仁美（伊賀市立久米小学校 教諭）

本県小学校教諭として着任以来、児童理解に基づく基礎基本の習得に向けて丁寧に関わり続ける授業実践や学級経営に努め、それぞれの赴任校で児童や地域の実態を踏まえた教育課題に真摯に向き合い、育んでいきたい子どもの姿や学校像の実現に邁進している。

平成26年度、伊賀市立新居小学校の校内研修リーダーとして研修テーマを「聴き合い、学び合い、仲間とともに高まり合う子ども—考えを共有し合う子ども—」と設定し、算数科を中心として教員の指導力向上に向けて、研修体制の充実を図った。

平成28年度、金融広報中央委員会及び三重県金融広報委員会の研究指定を受け、算数科を中心とした金融教育の公開授業を行い、成果を発信した。また、独立行政法人教職員支援機構が主催する東海・北陸ブロックの道徳教育指導者養成研修に参加し、学んだことを市内の教職員に還流するなど、市内での「特別の教科 道徳」の実施に向けた中心的役割を果たした。さらに、全国規模の研究大会において、ブラジルにルーツのある子どもを中心にすえた国際理解教育の実践を報告した。

令和2年度、伊賀市立久米小学校に着任し、児童の生活背景や心情を大切に学級経営を行うとともに、算数の習熟度別少人数教育を積極的に取り入れるなど、学力向上に取り組んだ。

令和4年度、「第56回三重県人権・同和教育研究大会」及び「第72回全国人権・同和教育研究大会」において、家庭環境が不安定で教育的に不利な環境にある児童を取り上げ、保護者・本人の願いや思いを丁寧に掘り下げ、学力の向上につながった事例を報告した。

③ 谷水 孝之（三重県立水産高等学校 船長（技術職員））

平成18年4月に本県技術職員として奉職以来、水産高等学校実習船三代目しろちどりに乗船し、三等航海士として安全運航と船橋の整備に努めるとともに、生徒の上級海技資

格取得に大きく貢献してきた。また、平成28年4月にしろちどり船長心得、令和2年4月に船長へと昇任した。

教育に携わる公務員としての責務はもちろんのこと、実習船の船長として、「国際航海船舶及び国際港湾施設の保安の確保等に関する法律」に基づく船舶保安管理者(SSO)として、船舶保安に関する責務を担い、年間4回実施される長期航海実習において、生徒の安全管理および船員の管理監督を行っている。この長期航海実習において、航海や機関の知識・技術を習得した生徒は、海技資格を取得し、県内外の船舶港湾関係で勤務するなど、日本の水産業、海運業界で活躍している。

また、三重県生涯学習センターや志摩市と連携して実施した小学生とその保護者対象の体験航海において、海洋環境教育や船舶職員の職業理解について地域に発信している。さらに、現在建造中の四代目しろちどりにおいては、生徒の学習活動を効果的に行えるとともに、船内の生活環境がより快適となるよう、機関長や司厨長等の船員の意見を集約しながら、実習船の環境を構築した。

以上の実績により、同職員は、実習船の環境構築及び実習船を使用した長期航海実習における教育実践により、本県のみならず日本の水産業や海運業を担う人材の育成に寄与している。

④ 種村 孝司（三重県立稲葉特別支援学校 教諭）

平成17年4月に本県中学校教諭として奉職以来、勤務校において保健体育科教諭として教科指導力の向上に努めてきた。また、特別支援学校に赴任してからは、特別支援教育に係る専門性を高めるとともに、保健体育科教諭としての知識を活かし、知的障がい者サッカーの指導に取り組んできた。特に、稲葉特別支援学校では、生徒同士の対話を重視することでコミュニケーション能力の向上を図り、平日の3日間、各1時間という限られた時間の中で集中的にサッカーの指導を行っている。結果として、チーム全体のレベルが向上し、全国知的障害特別支援学校高等部サッカー選手権において、平成30年度には4位、令和元年度にはベスト8へとチームを導いた。

また、同人の取組は、サッカーの指導を通じて、体力やコミュニケーション能力が向上したことで、一般就労にて企業等へ就職する生徒を多く輩出するとともに、社会人となってからも働きながらスポーツを継続する等、障がい者の社会参画や生涯学習への一助となっている。

さらに、校内での活動にとどまらず、県内の成人も含めた知的障がい者サッカーの普及・強化に尽力し、同校卒業生が多数所属する「FID 三重選抜」チームのコーチとして指導に携わり、特別全国障害者スポーツ大会（燃ゆる感動かごしま大会）への出場に繋げるなどの成果も出している。

以上の実績により、同教諭は、部活動の指導による生徒の社会参画に大きく寄与している。

⑤ 岩木 和樹（暁高等学校 教諭）

平成15年に暁学園中学校・高等学校に奉職以来、数学科教員として生徒の学力向上に尽力し、熱意を込めた、わかりやすく丁寧な授業は、数学を苦手とする生徒にも好評である。奉職と同時に中学校・高等学校合唱部顧問に就任し、現在に至るまで合唱指導を行っている。合唱指導では、技術的な向上はもちろんのこと、学園綱領「人間たれ」を念頭に置いた指導を常に心がけ、生徒の一人ひとりの「人としての成長」も支えてきた。同人のこの指導は生徒との信頼関係を深くし、部員数は中部7県で最大人数を誇る。

顧問就任後初年度に全日本合唱コンクール三重県代表として中部支部大会出場。3年目の平成17年以降は18年連続で毎年県代表として中部支部大会に出場している。平成19年には全国大会で銅賞を受賞。近年では「NHK 全国学校音楽コンクール」において二年

連続、三重大会・金賞、東海北陸ブロック・銅賞の優秀な成績を取めるなど、県内のみならず全国大会にも出場し実績を残してきた。また、部員は声楽コンクール全国大会において、上位入賞を果たすなど、後進の指導にも力を入れている。

コンクールや学校行事以外にも、地域活動に積極的に参加し、地域の文化祭をはじめ、商業施設におけるクリスマスコンサートや、人権フェスティバルや消費生活イベントなど主催のイベント等において、地域と連携したボランティア演奏を行っている。その中でも、東北大震災では、被害を受けた福島県葛尾村の小中学校の校歌をレコーディングするなど、生徒とともに合唱部としてできることを考え、積極的な支援を行った。こういった活動は、生徒に多様な学習の場を提供し、生徒にとって貴重な経験となるとともに、歌声による社会貢献活動として生徒の育成・指導に顕著な成果をあげている。

また、活動の成果報告として、地域における定期演奏会（3月）を開催し、毎年500人以上の方にご来場いただくなど、同校合唱部は住民の皆さんにも愛され、親しまれる存在となっている。

なお、部活動は過重にならないように、1週間のうち平日4日2時間、休日1日4時間と時間を決め、生徒の学習時間の確保等についても配慮し、適切な活動時間を心掛けている。

（2）教職員組織

① 松阪市立香肌小学校

松阪市飯高地域にある同校は、平成20年度に川俣小学校、森小学校、波瀬小学校の3校を統合し開校され15年目を迎える。統合した3年後に複式学級が編成されることを見据え、統合時からへき地複式教育の研究を進めている。平成22年度には、「へき地複式教育研究会東海北陸大会」において、へき地における教育の振興（小中連携、地域連携等）について発表を行った。

平成28年度からは「松阪市立小中学校小規模特認校」の指定を受け、少人数での教育の良さを生かした、きめ細やかな指導や特色ある教育を行う同校への就学を希望する児童・保護者を、市内全域から受け入れている。

平成29年度には「三重県へき地複式教育研究会指定校」として、「わたりの授業（※複式学級にみられる授業方法の一つで、教師が学年をわたって授業を行い、他学年の授業を並行して行うこと）」の授業公開を行い、授業者が直接指導していないときでも、児童が見通しをもって主体的に学習に取り組む様子を発表し、高い評価を得た。

平成30年度より「コミュニティスクール」を開始し、地域ボランティアの支援を受け、地域の特性を活かした体験学習（栽培、アマゴ釣り、カヌー体験、郷土の伝統的なお菓子「でんがら」づくり等）や、校外学習・地域学習（中央構造線の露頭の見学、地域の発展に尽くした人物たちゆかりの史跡見学等）など、地域と密着した教育活動を行っている。こうした活動は、児童の「学びの深まり」を育むだけでなく、地域との「つながり」を大切に地域と関わり、ふるさとを愛する心を育むことにもつながっている。

令和元年度からは、保護者や地域住民が中心となり親子山村留学実行委員会を立ち上げ、学校も連携し、親子山村留学制度を開始した。PR活動、オンライン説明会、オープンスクール、体験入学等を実施し、この制度を活用した転入生も年々増加している。また同年度には、地域開放型図書館「本処かはだ」を開館し、地域の方々が図書館を利用しやすくするとともに、定期的に「おはなし会」や合奏や音読を行う「やまびこタイム」を実施している。

現在、同校の図書館は、地域の方々と児童との交流の場にもなっており、様々な形で空間や視点を変えながら児童が読書活動に自然と入りやすい環境となっている。

② 三重県立明野高等学校

畜産部門では、平成29年度から食品廃棄物を再利用した飼料「エコフィード」の開発をはじめ、それを用いて養豚を実践し、ブランド化した豚肉を用いた商品を、地元企業と連携し開発している。特に、「エコフィード」の開発については、令和3年7月に「あかりのほろよい Mix」として、エコフィード認証を県内で初めて取得した。また、令和5年7月に志摩市で開催された先進七カ国(G7)交通相会合において、「持続可能な開発目標(SDGs)」に着目した取組を紹介する等、同校の取組は国内外にも広く取り上げられた。

作物部門では、令和2年度から地元の大学や企業と連携し、ブランド酒米「弓形穂」を栽培するとともに、そのもみがらを利用した日本酒「明野さくもつ」を開発している。

さらに、令和5年度からは、純米吟醸酒の酒かすを原料に加えたクラフトビールを開発する等、新たな取組に着手している。そして、これまで以上に「持続可能な開発目標(SDGs)」を意識し、豚の排泄物やもみがらを利用した堆肥を用いて栽培した米を原料とした日本酒を醸造し、精米・製造過程で出るくず米や酒かすを豚の飼料に加えることで豚を飼育するという、両(畜産・作物)部門の活動を結び付けた循環型農業を、地元企業と連携して実践している。

このように、地域と連携した循環型農業を実践することで、「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に努めるとともに、本県の農業教育の推進に大きく寄与している。